

悔い改めた生物学雑誌が、自分自身の ID-微調整論文に、 弱い反論を提出

Greatchain
2020/10/14



まず、このタイトル（Evolution News に載っている論文を、そのまま訳した）は、おそらく普通の読者には、何のことかわからないだろう。それをここで解説することが、我々の仕事である。訳者の私自身、最初は何のことかわからなかった。しかしこれが分かってくると、ここで言っていることが、ある種の**凄み**をもった、生物学世界の事件であることが判明する。

そこでまず、先日紹介した、ID に対するダーウィン側の偏見と敵意の一例の、短い文章をご覧ください：——

ダーウィニストの‘キャンセル文化’にもかかわらず、インテリジェント・デザインが生物ジャーナルの難関を突破する——この論文は査読を通過し、同ジャーナルのトップ編集者の公然たる悪意にもかかわらず、出版を認められた

ここに述べる事件は、この短い記事の後日譚として起こったものである。それは、この ID に悪意をもつ「トップ編集者」が、問題のこの論文が、ID とつながった内容であることに気づかなかったことから起きてしまった。

Evolution News はこのように書いている：——

我々が先週、論じたように、編集者が誤りを認める記事(disclaimer)を載せた後で、この罪を悔いる『理論生物学』*Theoretical Biology* ジャーナルは、さらに進んで、**Darwin enforcers** (これは〈ダーウィン警察〉とも〈ダーウィン権力者〉とも訳せる!)からの罪の赦しを求めることにした。このジャーナルはどんな罪を犯したのだろうか? 編集者たちは、**生物学的 fine-tuning について論じた、インテリジェント・デザインを容認する論文を、出版してしまったのだ**。そこで彼らは今、元の論文を自ら批判するような、ある短い手紙を公表した。その著者たちは、すべてジョージア工科大の生物学者で、驚くほど弱い(説得力のない)反応を提出した。彼らは、この論文における事実の主張は問題にせず、デザイン推定の背後にある論理を、攻撃することに集中している。

これで事実はわかっていただけたと思う。自分の所の雑誌の**宗旨**(ダーウィニズム)に反する論文を、あやまって認めてしまった編集者たちが、恐ろしいダーウィン警察に許しを乞うために、論文著者たちに、謝罪の一札を入れさせようとしたが、彼らは当然、自分たちの主張を撤回はせず、その代わりに、IDの重要な概念の一つである「還元不能の複雑性」Irreducible Complexityの不備を攻撃しようとした。しかし、内外から十分に認められ、十分に時間をかけて論証された、この「デザイン」の基本原則を崩すことはできず、「驚くべく弱い」主張になっている、という話である。

ワオ! 恐ろしや——とすべき内容である。それにしても「理論生物学」とは何だろうか? この言葉は昔から耳にはしていたが、何かわからなかった。しかし、ここから納得できるようになった気がする。これはやはり、ダーウィニズム、あるいはそれに類する、生命を(自然選択のような)人為的な原理に従わせる(enforceする)理論であろう。もしそうなら、そういう学問はごめん被りたい。我々は生命を、何か物的なものや力に還元して、それが生命、特に人間の生命であるかのように、言われたくないからである。

したがって、この「ダーウィン警察」に強制されて提出した、学者たちの自己補正の手紙は、IDから見ると、半分は納得できるが、残りの半分は大いに不満の残る——というより理屈の通らない——ものになっている。このように——

「この論文は、理論生物学の我々の理解のために、何を貢献しているであろうか? Thorvaldsen と Hössjer の主たる主張は、タンパク質合成物、分子モーター、および生物学的ネットワークは、ランダムではないということである。これは——数学的な意味で——真理である。しかし新しい発見ではない。彼らが新しさを主張するのは、すべての可能なシステムの空間の中での、これらの特殊なシステムの存在は、非常にまれなので、「ファイン・チューニング」——インテリジェント・デザインの代替語——

によってしか、存在することができないということである。生きたシステムの構成物——あるいはシステムそのもの——が極めてまれであるということは、それを動かすもの（agency）や意図（intent）を意味するものではない。」

この引用文の上半分は正しい主張である。しかし最後のセンテンスは——意図的か否かは別にして——ゴマカシである。このことを、この記事の論者は、面倒がらずに懇切丁寧に説明している。バクテリアに生ずることのある、この鞭毛のモーター装置については、多くの人々によって語りつくされている。このモーターが機能するためには、約40個（？）のタンパク質による部品が、同時に組み合わさって、できるのであって、ダーウィン式に一個一個、偶然につながって、つくられることはない。ということは、そのシステムの出現には、意志や意図や目的が働いている、すなわち知的にデザインされ、創造されたものでなければならない。これが「還元不能の複雑性」と呼ばれる生物構築の原理である。（その、ばね式ネズミ捕りの比喻な有名である。）

これを故意に、あるいは考えにくい、無知によって、認めようとしないう論文の著者たちに対して、この記事は丁寧に付き合い、その結論のあきれた矛盾を指摘している。

ダーウィニズムはもちろん科学ではなく、科学よりは独断的宗教に近い。しかしそれよりもむしろ、ワンマン的な会社組織に近い。これを疑う人は、ダーウィニズムの指導的権威者ユージェニー・スコット女史が、どう言ったかを聞いてみればよい。

彼女は、ダーウィニズムに疑問を呈しただけで、職を追われることのある現在の学問体制をどう思うか尋ねられ、こう言った：——「社員だって、会社の方針に従わなければクビになります。当たり前でしょう。」

正しい論文を強制的に撤回させようとしたのは、やはりワンマン経営の会社だったとしか考えられない。

——以上